

くちの体操



河原 多恵子 (かわはら たえこ)

フリーランス アナウンサー／コーディネーター

岩見沢市生まれ。北海道立札幌北高等学校、北海道女子短期大学体育科を卒業し、北海道放送(株)へアナウンサーとして入社、数々の番組を担当。2011年、第48回ギャラクシー賞ラジオ部門大賞受賞作、ラジオドキュメンタリー「インターが聴こえない～白鳥事件60年目の真実～」のナレーション担当。2012年2月からフリーランスとして活動、朗読会や言葉のワークショップなど開催。HBC-R「多恵子の今夜もふたり言（毎週日曜21：00～21：30）」パーソナリティー。

ネサケヤ

「ネサケヤ」、初めての言葉だったので思わず聞き返しました、「ネサケ？」。

会話はキャッチボール。受けとって投げ返して続くもの、返事をしなきゃとあせるのですが、言われている意味がわかりません。会話の相手は漁から港に戻った漁師のおじさんたちで、日焼けした顔に無事帰港した安堵感がにじんでいます。そして、目の前に出されたドンブリには山盛りのイカ刺し。彼らはこれを振る舞い、その呼びかけがネサケヤ、「ネエサン、食えや」だったというわけです。透きとおっていて、箸でつまむとイカはマッチ棒のように直立不動。醤油をかけ、たとえ行儀が悪いといわれてもお構いなしに口に放り込むと格別の味がします。右手に割り箸、左手にはコップ酒、感じるのは潮風、聞こえるのは彼らの声。海は「板子一枚下は地獄」といわれます。だから会話は的確に意思が伝わる短い言葉になる、誰かからこう聞いたのを思い出しました。ネサケヤは、独特の輝きとぬくもりを感じさせるもてなしの言葉。風土が育て伝え、地元が愛する言葉に人は寄り添い、包みこむ力もあると知りました。地域やルーツを思わせる言葉に触れると心の栄養をいただいた気がしますね。以来、どこの浜でもネサケヤと声がかかると喜んでごちそうになり、おかげさまで心身ともこんなに豊かです！

くちの体操

毎朝、くち（口）の体操をします。といっても、しわをなくして口角を上げて美しくなりたいと思っているわけではありません。正しい発音のための体操です。話し言葉としての日本語を、美しく明解に使っていくこと。これは、言葉で仕事を続ける者にとって生涯のテーマであり、役目であると思っています。放送局のアナウンサー職につくと、基礎訓練として五十音の練習が待っていました。小学生が習うように、明けても暮れても「あかさたなはまやらわ・おこそとのほもよろを」。五十音を縦横斜めに並べて声に出し、母音と子音の正しい口の形を身につけ、発声発音、苦手な音

を徹底的にクリニックしていきます。しかし、繰り返し練習しても正しくならない音はあるもので、例えばラ行。巻き舌でべらんめえ調になったり、ランプがダンプになったり。これができなければプロではないと言われ、悔しくて号泣した日もありました。そして今、何十年たっても苦手意識は変わらないものです。先日、ラジオドキュメンタリーのナレーション原稿を渡されてやる気満々、下読みを始めると「れる・られる」が多くて絶句しました（笑）。

ところで、歌舞伎十八番の一つに数えられる演目、「外郎売」をご存知でしょうか？アナウンサーや声優、演劇など、声の仕事を目指す人にとって、五十音同様、こちらも大切な教本になっています。売るのは、お菓子の「ういろ」ではなく薬。早口言葉の集大成であり、かつ長い科白は、五十音の各行を巧妙に組み合わせた文章の連続です。発声発音の欠点、呼吸量不足、中途半端な腹式呼吸など、聞く人が聞けばあっさり露呈してしまう、手強い本なのです。外郎売りは自分の親方について説明し、自分はインチキな薬売りではないと強調、薬の口上を始めますが、効能を述べるくだりが特に面白く、音（オン）の遊びと掛けことばにも魅かれます。音読するときは、老若男女、今日はどんな外郎売りに扮してみようかと思ひ、その役どころになり切って口の体操をしています。資料によれば、「外郎売」の初演は享保3（1718）年、江戸森田座で二代目市川團十郎が演じたということです。時代を経てなお、言葉の表現者たちがこれを手本として受け継いでいます。

良い声

話したり歌うとき、声を出します。大きな声の人もいるし、小さな声の人もいる。声の素になるのは息です。声は呼気が声帯を振動させて出るものですから、呼気の量が多くて強い時には大きく強い声になり、逆だと小さく弱い声になってしまいます。一体、自分はどんな声で話しているのでしょうか。素敵な声・良い声だと言われるとうれしいものですね。私も若い頃は否

定しながらも有頂天だったような気がします。では、他人が感じる良い声、自分が願う良い声はどんな音色なのでしょう。美しい・荒っぽい、かわいい・かわいくない、心がこもっている・やる気のないなど、声は無限です。ただ、どんな場合にも良い声には芯、「伝える気持ち」という芯があると思っています。遠くまで通る大きな声が良い声であるとは限りません。「相手に伝える気持ちが備わった声」が本当の良い声だと思うのです。ある時期、ラジオのニュース番組を担当して、毎日ニュースを読んでいました。ニュースは文章の意味のとおり、正確に読むことが求められます。アナウンスは美しい声を聞かせるのではなく、優れた技術を披露するのでもなく、たとえ下読みができない「突っ込み原稿」も意味のとおり・正確に伝えることが当たり前。気持ちに余裕のない日は悪戦苦闘して良い声と向き合いました。転勤や異動、そして新社会人がデビューして、新たな出会いのある季節を迎えました。伝える気持ちとともに良き出会いを待ちたいものですね。最後にひとつお願いを。自分の名前を言う時はゆっくりはっきり聞かせてください。「使い慣れた自分の名前」、つい早口になってしまいます。結果、「誰なの？」と思われては残念です（笑）。

